

「松江・安来広域連携教育」事業

「宇宙教育」の体系化と実践を通して
家庭、学校、地域の教育力を高める

宇宙という言葉や、それが醸し出すイメージには、人をとらえて放さない魅力がある。その宇宙を入口にして科学的思考を養うことで、地域や社会を支え、さまざまな問題を解決していく市民を育てるのが「宇宙教育」の目的である。その宇宙教育を組み込んだ教育実践を展開しているのが、島根大学教育学部であり、提携する松江・安来広域連携事業実行委員会教育実践部門である。

身の回りの事象を俯瞰的、包括的に捉え、
社会で生きる市民としての資質を養う

「宇宙教育」と聞くと、何を思い浮かべるだろうか。宇宙の成り立ちや構造、宇宙飛行や宇宙開発の歴史や技術などを科学好きな子どもたち、あるいはそれに専門的に携わろうという人々などに教え込むことと思われるかもしれない。しかし、「それは宇宙教育を狭義化して捉えた、いわば狭義の宇宙教育」だと、島根大学教育学部百合田研究室を主宰する百合田真樹人さんは話す。

百合田さんや、研究室の高須佳奈さんが「松江・安来広域連携事業実行委員会 教育実践部門」として取り組んでいる宇宙教育とは、「宇宙そのものの理解を直接的な目的としているのではなく、地球を含め、自分の身の回りの事象を俯瞰的な視点で眺め、包括的に捉える力を養う」ためのものであり、「問題解決に向けて自分で学んだことを活用していくための練習や準備であり、社会で生きる市民としての資質を養うことを目的」としたものだという。つまり、宇宙を目的としてではなく、導入や素材といった手段として捉えていることに特徴がある。

百合田研究室では2008年度から宇宙航空研究開発機構(JAXA)などと研究を重ねる一方、2010年度には松江市、安来市の教育委員会とも連携し、学校教育と社会教育を結びつけることで、学校、地域社会、家庭をつなぐための教育実践の一環として宇宙教育に取り組んできた。このように人格形成、市民形成という、教育が本来持

つべきひとつの目的に準じて体系的に宇宙教育に取り組んでいるところは国立大学ではほとんどない。島根大学では教員養成課程における選択必修科目のひとつとして「宇宙教育」が設置されているほか、教員免許更新研修や地域の学校と連携した体験学習活動などにおいても、宇宙教育を組み込んでいる。



大好評だった子どもたちによるプレゼンテーション



動きたいときに自由に動けるようブルーシートを採用



スクーリングで取り組んだ大きな熱気球の製作



2013年度は4回開催された「宇宙の学校」の受講生募集チラシ



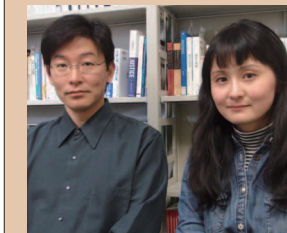
「宇宙の学校」の第一回目の開催に合わせて実施されたシンポジウムの告知チラシ

「宇宙の学校」の開講に合わせて実施された
シンポジウムで家庭の教育力を考える

松江・安来広域連携事業実行委員会とその教育実践部門を担う百合田研究室では、これまでの取り組みをより深化させる意味で、学校、地域社会、家庭など、さまざまな場面での教育を考え、実践することで、子どもたちの健全育成や将来にわたる強い地域社会づくりを、さらに地域の活性化へとつなげていくことを目的に、2013年度に「松江・安来広域連携教育事業」を展開したが、その事業の全般にわたって、AJOSCからの助成が活用された。

具体的な取り組みのひとつとして、認定NPO法人子ども・宇宙・未来の会(KU-MA)、JAXA宇宙教育センターとの共催で、年4回の「宇宙の学校 松江・安来教室」を開催した。これは2011年度から実施しているもので、松江市と安来市の小学校2~4年生とその保護者約

担当者より



私たちの取り組みを
地域に公開できました。

松江・安来広域連携事業
実行委員会
教育実践部門
島根大学教育学部
百合田真樹人さん(左)
高須佳奈さん(右)

今回の助成により、学校教育、社会教育の関係者が一堂に集まって話し合う機会が持て、私たちが実践する宇宙教育を多くの方々に公開することができました。シンポジウムの模様を地元紙が特集を組んで紹介してくれたことで、「島根大学がこういう形で社会貢献していることを初めて知った」という声も多く寄せられています。宇宙教育に対する正しい理解に向けて、今後もがんばっていきます。

50組100~150名を対象に、親子で取り組める工作や実験を行うスクーリングと、配布された教材を活用しての家庭学習で構成されており、宇宙とは直接、関わりのないプログラムが組み込まれているのが特徴である。「年々、募集とともにすぐに定員が埋まるようになってつづあり、認知度が上がってきているのを感じます」と、高須さん。両親での参加、小学生の子どもを持つ学校の先生の参加が増えつつあるという。

さらに7月14日には、「宇宙の学校」の第一回目の開講に合わせて、「宇宙がたつむぐ新しい学び—家庭の「教育力」再生—」をテーマとするシンポジウムを開催した。このシンポジウムは学校、家庭、地域の教育力の再発掘を目的にしたもので、「家庭教育の持つ力を学校や地域がどのようにフォローしていくかを、みんなで考える場にしたい」と、百合田さんは話す。当日は約200名の参加者があり、KU-MA会長の川泰宣さんによる講演、KU-MA理事の遠藤純夫さんによる特別スクーリングのほか、これまで宇宙の学校に参加した2組の家族によるプレゼンテーションが行われたが、家庭で宇宙教育にどのように取り組んだかという子どもたちの発表は実にすばらしいものだったという。科学的思考で問題を把握・解決し、それを周囲に伝えていく力を養うという宇宙教育の効果が、確実に子どもたちに浸透しているということだろう。